

“FORTE”

社会医療法人 同仁会

耳原総合病院

Mimihara General Hospital

#041

病院探訪
大阪編



全国の特徴ある
病院取材する
“フォルテ”

日本列島 病院探訪



Interview_ ドクターズマガジン編集部
Text_ 佐藤恵
Photograph_ 丸谷達也

Interviewee
病院長
河原林 正敏
Masatoshi Kwarabayashi

Interviewee
副病院長
大矢 亮
Akira Oya

職員全員でつくり上げる断らない救急

医療・介護・福祉の総合力で地域を守る



次のページへ



診療科を超えた医療を提供すべくセンター化を入れ、大阪府がん診療拠点病院にも指定されるとともにがん患者の相談窓口を設置するなど、がん診療の充実にも余念のない同院。基幹型臨床研修病院として、10年連続フルマツチを達成する研修にも定評がある。多角的な医療に取り組む耳原総合病院について、院長の河原林正敏氏、副院長であり総合診療センター長でもある大矢亮氏に話をうかがった。

「無差別平等の医療」を掲げる大阪府堺市の耳原総合病院。戦後間もない1950年、地域住民による一口1000円のカンパによって民家の2階に開設した「耳原実費診療所」が前身となっており、70年を超えてもなお同じ土地で変わらぬ思いを貫いている。

同院の母体である社会医療法人同仁会は、耳原総合病院の他に、内科歯科診療所、介護老人保健施設、ケアプランセンター、地域包括支援センター、看護学校を有する従業員約1600人の医療・介護・福祉総合事業体。「断らない救急」を標榜する耳原総合病院では2023年に救急応需件数が年間7500件を超え、地域住民から厚い信頼と期待を寄せられている。

年間7500件の搬送を支える
病病連携の地域トリアージ

堺市は人口82万人を擁する政令指定都市。2013年11月、地域医療支援病院の認可と並行して「断らない救急」を打ち出すようになった同院の根底には、中核病院としての使命を果たすという強い信念があった。

「30年前はかかりつけの病院として外来を診ていましたが、それでは地域医療の役割を果たせない」と、2000年ごろから当時の先輩たちがER型救急の研修に行くなどして今の土台をつくり上げました。『断らない救急』がモットーです」（大矢氏）

救急用のベッドを診療科ごとに準備し、救急の医師と各診療科の医師との連携をシームレスにするなどの工夫を重ねることで、右肩上がりが続く搬送件数は2015年の新病院建設を機に5000件を超え、2018年には6000件を突破。実際に「断らない」でいたところ、ベッド稼働率が100%近くになり、病棟運営に黄信号がとまるようになった。

そこで同院が取り入れたのが「地域トリアージ」。搬送されてきた患者をトリアージして、「病



大阪府堺市

大阪府堺市は古墳群で知られ、世界遺産の仁徳天皇陵を擁する歴史都市。刃物産業や茶の湯文化も盛んで、産業と文化が共存する魅力的な地です。臨海部の新都市開発や伝統産業の継承も進み、現代と歴史が融合する堺市は、訪れるべき多様な魅力に満ちた都市です



Interviewee

耳原総合病院を漢字一文字で表すと

育

地域医療の実践を通じて病院全体で医師をはじめ多くの医療専門職を育てていくことを使命としている病院であり、教え学び合うことで互いに成長していきたい。

病院長 河原林 正敏



病連携」により転送する取り組みを進めたのだ。

「地域の病院にお願いできる患者さんは、地域の連携病院にお願いすることで機能的な住み分けができるようになり、当院は地域で、果たすべき入院診療に集中できるようになりました。堺市内の病院にはスムーズに受け入れてもらえる。信頼を得てネットワークづくりをしてきた賜物です」（大矢氏）

2017年に284件だった地域連携病院への転送は、2022年には549件とほぼ倍増。搬送件数は2023年に7500件を超えたが対応に死角はない。高齢化率の増加も視野に入れ、地域の中の病病連携を強化している。

そんな同院でも、コロナ禍での救急対応には苦慮したという。未知のウイルスとの戦いは試行錯誤の日々。手探りの感染対策に、恐怖心を抱く職員も少なくなかった。しかし、会議を重ねて対策を立てながら対応する中で、内科系の二次救急として知見を積み重ねてきたことが同院の強みだと気付いた。

「発熱や感染症への対応には慣れていました。これまでの経験を生かせる。相手だと分かって、

早期にコロナの恐怖を払拭することができました」(大矢氏)

救急に本腰を入れた当初、救急の花形は外傷や外科系であり、内科中心の二次救急にニーズがあるのかと悩んだ時期もある。しかし、福井大学医学部附属病院の寺澤秀一氏から「高齢化社会に向けて、内科の救急こそ必要だ」とアドバイスされ、腹をくくってこれまでやってきた。

「コロナ禍でそれを改めて痛感しました。当院には感染症に強い総合診療医が在籍してくれている。国内外の知見を周知し、救急をバックアップしてくれて心強かったです」(河原林氏)

多職種連携によるセンター化で医療プロセスの質向上を実現

2015年4月、規模拡大のため建設された新病院がスタート。ペイシエントファーストを指して同年9月に立ち上げたのは、多職種連携による臓器別のセンター化だ。「寄り合い」ではなく「チーム」として循環器、腎透析、消化器の3センターから始まり、周産期ファミリーケア、周術期支援、総合診療と現在は6センターに及んでいる。各センターが事業

コロナ禍での救急対応



「平時でも救急は逼迫している中、当時発熱外来や濃厚接触者外来の受け入れ先にもなったことで、物理的なスペースの確保に苦労しました。また、一般受診の減少で経営的にも落ち込み、打撃がありました」(河原林氏)



「発熱や感染症への対応には慣れていました。これまでの経験を生かせる“相手”だと分かって、早期に恐怖を払拭することができました」(大矢氏)

目標を検討し独自運営を行うことで、経営的な指標が具体化され行動が明確になった。

「複数の診療科が横断的に関わることによって、患者さんの利便性と診療の効率を上げていく。医療プロセスの質向上が最大の目的です」(河原林氏)

全体をけん引しているのが循環器センター。同院は心臓カテーテルの導入も早く、循環器分野で先進的な取り組みをしてきた歴史がある。現在循環器の医師は7人おり、心カテは619件(2023年度)と近畿で7位の実績を誇っている。腎透析センターが管理する透析患者数は250人に達し、周産期ファミリーケアセンターでの分娩数が700件を超えるなど、それぞれ堺市



Memo

患者負担の少ない医療を志す同院では、差額ベッド料金なし、無料低額診療制度の活用などを通して、在留資格のない外国人や特定妊婦など、公的な制度の狭間にこぼれ落ちてしまう人々を救済している



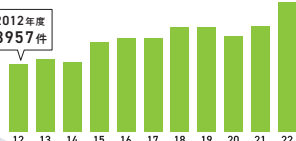
Hospital Data

▼救急搬送件数(年間)

7669 件/年

※2022年4月～2023年3月

2012年度
3957件



▼救急指定

2 次救急

▼病床数

386 床

▼診療科数

30 科

▼医師数

117 人

※常勤医師

うち専攻医

14 人

うち初期研修医

17 人

「救急、総合診療、在宅医療、クリニックの外來など、法人組織との連携も含めたセンターとしての一体運営を推進しています」(大矢氏)

新病院スタート時に導入した「ホスピタルアート」は、職員の声によって実現したもの。新病院のコンセプト策定についての議論を重ねる中でアートのイメージが固まり、「希望のともしびプロジェクト」が立ち上がった。

そのための第一歩として、今年度からセンターの合同会議を開催。各センターでの課題や進捗、情報を共有する場を持つことによって、病院全体のクオリティを上げるのが狙いだ。また、救急と総合診療が一体化した総合診療センターをさらに強化したいと語る。

内では有数の規模となっている。消化器センターが受け入れる吐下血による救急搬送件数は堺市で1位(2023年度、市内における消化器救急を屋台骨として支えている。このように、センター化の効果は現れ始めている。「今後の目標は、それぞれのセンターのレベルを均等に引き上げ、互いに切磋琢磨できるようにしていくことです」(河原林氏)

「当初は賛成意見ばかりではありませんでした。費用もかかりますし。でもコンセプトストーリーを大事にして、導入することでどんな医療をつくり上げていきたいのかを話したのが大きかった」(河原林氏)

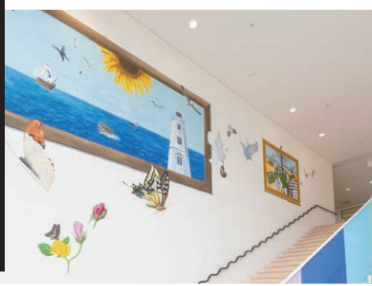
10年連続フルマッチを達成 病院全体で医療人を育てる

2004年スタートの臨床研修制度以前から、耳原総合病院では研修医を積極的に受け入れていた。10年連続フルマッチを達成し、2023年には研修評価の最高点である10点を得て定数増員を果たした。基幹型臨床研修病院の指定を受け、人気病院として知られる同院だが、過去にはマッチングの史上最低記録を叩き出したこともあった。

「2008年は、定員8人に対し4人という危機的状況でした。一念発起して臨床セミナーを開催し、市中病院の面白さややりがい伝える場をつくりました。そのおかげで知名度が上がり、回復の兆しが見えてきたんです」(大矢氏)

次の課題は、研修医をどう育てるか。そこで打ち出したコンセプトが「やさしい主治医力」と

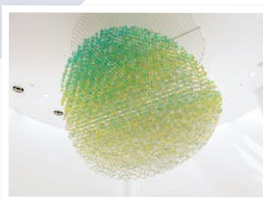
ホスピタルアートの取り組み



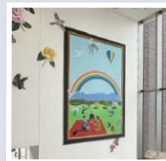
「病院らしくない病院」として、地域交流の場にもしたいと思っています。地域住民の視点で発想してくれる職員がいるチームでよかった。コロナ禍を乗り切る力をアートからもらいました」(河原林氏)



エントランスホールに浮かぶオブジェ、大きな双葉の形をした「希望の芽」は、1万9000枚のハートで構成されている。一枚一枚のハートは、開院当時「自分たちが診てもらえる病院をつくりたい」と住民が持ち寄ったカンパの100円をイメージしている



病院の外壁に描かれたケヤキの木は「強さを増して根差す医療」を、照明にあしらわれた小鳥は「雨の後の虹の羽をまとった地域住民」を表している



ロボット手術では、すでに婦人科で1例目の手術を行い、今後は泌尿器科、消化器外科での運用も予定している。また、堺市では初となる新たな放射線治療機器の導入計画も進んでおり、層の厚い治療に期待がかかる



手術支援ロボット「da Vinci Xi」を導入



「たしかな当直力」だった。

「もちろん研修医は主治医にはなれませんが、主治医としての自覚と責任を持ってもらうのが目的。当院には一から医師を育てる土壤があるので、研修医が成長するのは早いです」(大宅氏)

研修医が最も不安を感じる当直については、指導医がすぐに

コンサルトし、適切にフィードバックできる体制を固めている。

「当直もどんやっつてもいい

ますが、大事なのは研修医を『一人にしない』こと。必ず指導医と共に行うことで、力もつきま

すし満足度も上がる。その口コミがいい循環をもたらしていると実感しています」(大矢氏)

救急応需件数の多い同院では、

2年で1000以上の救急症例を経験し、一人で救急初期診断・治療ができる技術を修得できる。

総合診療センターでは感染症診療に携わることもでき、即戦力

につながる「ベッドサイド力」も身に付くという。

「患者さんに協力をしてもらい研修医が診察手技を行い、ベッドサイドでの情報収集と判断の力を養います。成長意識の高い人に向いている現場だと思います」(大矢氏)

同院は大阪府がん診療拠点病院としてがん診療にもさらなる力点を置くべく、2023年に手術支援ロボット「da Vinci Xi」を導入した。

目下の課題は高齢者救急への対応と急性期病院の特化だと河原林氏は話す。

「院内ではスペースの確保や動線の工夫をしながら急性期機能の充実を進め、対外的には堺市内の二次救急施設としてのポジションを固めたい。がん診療の強化とともに、グループ全体として在宅医療にも力を入れるつもりです」(河原林氏)

在宅から緩和ケアまでカバーし地域包括ケアのネットワークが形成されている中で、急性期から在宅をつなぐハブとしてのポテンシャルを備える同院には、人材の確保と育成が求められている。

「総合的に幅広く診られる人材が必要なので、地域に貢献できる医療人を病院全体で育てていきたいと考えています」(河原林氏)

今回、探訪した病院

社会医療法人 同仁会
耳原総合病院

〒590-8505
大阪府堺市堺区協和町
4-465



民間医局
コノ記事は
こちら

